『深夜光 (01/02)』

金網のフェンス越しに
色々な物が積み重ねられ
投光灯に照らされている
敷地は広くアスファルトの黒き
大地に白線が走っている

資材置き場らしい
無人のなかで投光灯は黙々と
周りを照らし
その明かりの中で
積み重ねられた資材が佇んでいる

ふっとむしょうに私の心は
生きているのが堪らなくなった
人と人との中で 生きて行くのが
耐え難く嫌になってきた
目前の景色に湧いてくる

『裸木 (01/04)』

散り忘れた枯れ葉が
裸木に残っている
かって葉いっぱいに広げた樹を
いまは茶色に縮こまって
裸木に残っている

木枯らしの吹く様を
知ろうとして散らずに居るのか
雪を見ようと散らずにいるのか
裸木に散らずにいる枯れ葉
散り際を忘れたように揺れて

ゆくっりと電車が入ってき
私は乗り込む
ベンチの座席に人はまばらで
人生に困ったようにいる
目を開けて人は私を見る

電車は再び動きだし
私も座り目を閉じて
走る揺れに己の身を任せる

人生の困惑へとその気配へと
ゆっくりと私も運ばれて行く

『雨降らず (01/05)』

道を濡らす雨はなく
草木を湿らす雨もない
大地を右往左往する
水の流れもない

太陽は真紅に燃え昇り
陽あたり所には暖もいらない
室内の草木は冬に春を開き
霜に在るは枯れていく

雨降らず降らず
地は乾きヒビが走り
雨降らず降らず
草木は乾き枯れ野なり

道を濡らす雨はなく
空はセブリアンブルー

草木を湿す雨もなく
空に太陽が燃えている

『**旗** (01/21)』

風にポールの日の丸が
たなびいている
はたはたと
ひたひたと音を発てて

広い青空の中へ
日の丸が旗めいている
……
……
勇ましく力強く
風の中で一杯に広げて

ポールの旗が
たなびいている
大空の中へ風に
ひたひたと音を発てて

『**朝陽** (01/26)』

垣根に朝陽が当たり
赤いツバキが
青空へ映え
緑の葉が眩く庭に光る

人に生きて
さわやかに感動し
人に生きてへ
命の喜びを思う

だが……苦しみも
悲しみも
生命の淋しさが
今日も始まる

垣根に朝陽が当たり
赤いツバキが
青空へ映え
緑の葉が眩く庭に光る

『**風** (01/26)』

心がどんなに
温かさを欲しがろうとも
風は吹き荒び
冷たさが 透り染み込んでいく
飢えと 寒さを
震えながら 堪え忍ぶ

幼い頃を 思い
両親を 思い
かすかな思い出を焚いて
暖を取り 風に涙を流す
切なさの果てに
生命には死しかない

生命の苦しみに
宇宙が差し出す救いが
死と消滅なら
淋しさを堪え忍んだ
道のりは 何なのか？
風が ひゅーっと消していく

『苔 (01/28)』

昼の陽光を吸い込んだ
墓石が眠れる霊に
温もりを抱え込み
彼らなる死者の叫びを
優しく眠らせている

生きて舐めた
堪え忍んだ月日へと
今に陽光の温かさを
子守の唄うごとく
死者なる心へと慰めている

墓地に眠る彼らなる
死者の叫びは
昼に陽炎となりて大空へ
夜に霊魂となりて星空へ
吹く風に散っていく

End all 1996/01

『**祈り** (02/02)』

暖かき陽の光は
御堂にあれど
この世を照らす光りは
無常の路
手のひらの幸福に
感謝の祈りが念
四方に響くなり

朽ちた御堂に
尼の一人祈りあり
焚き昇りたる煙りは
紫雲に似たりける
祈りにて祈りにて祈りにて
一切浄土を願う御声
四方へ響くなり

陽の光あれど
朽ちた御堂は残雪の中
尼一人の念響が
四方雑木林を透り
風に運ばれ川に流れ
祈りの御声が

大地の生きへ溶けて行く

『**風声** (02/20)』

深夜に吹く風の
悲しみを
木々は聞き
地が振るえ応える

この世にはあらぬ
死者の恨みか
寝静まる憩の上を
凪がれていく

往生の出来ぬ
血の哭嘆が
亡霊となって
徘徊する醜い音色

死せる静かさの中で
夜明けとともに
世は血に染まり

人は鬼になって行く

『**祈り(二)** (02/20)』

祈りにすがらなければ
苦悩も消えない己が心
如来なら悟りへと路開くが
煩悩の人間なれば
それもかなわず ただただ
如来 二十五の菩薩へと祈り願う

南無 如来 如来 如来

南無 観音 勢至 薬王 薬上
普賢 法自在王 獅子吼 陀羅尼
虚空蔵 徳蔵 宝蔵 金蔵 金剛蔵
光明王 山海慧 華厳王 衆宝王
月光王 日照王 三昧王 定自在王
大自在王 白象王 大威徳王 無辺身

あらゆる生け有る物の
極楽浄土を

南無 如来 如来 如来

南無 観音 勢至 薬王 薬上
普賢 法自在王 獅子吼 陀羅尼
虚空蔵 徳蔵 宝蔵 金蔵 金剛蔵
光明王 山海慧 華厳王 衆宝王
月光王 日照王 三昧王 定自在王
大自在王 白象王 大威徳王 無辺身

祈りにすがらなければ
苦悩も消えない己が心
如来なら悟りへと路開くが
煩悩の人間なれば
それもかなわず ただただ
如来 二十五の菩薩へと祈り願う

『祈り(三)(02/20)』

この世に有る
霊鷲山浄土
蓮華蔵世界
密厳浄土

菩薩界に有る
兜率天
補陀洛山

西方に有る
極楽浄土
東方に有る
浄瑠璃光世界

ただただ祈りによって
如来と二十五の菩薩へ
導かれる死後なり

『御堂(02/20)』

今年は始めてのようですね

ええ こんな時期にも
お祈りしているのですか

日課ですから それにしても
寒さ冷たい折に 来るとは

ここが好きなのです
周りの山々の肌
遠くの町並み
眺めているのが好きなのです

そうですか 何時もお土産を
頂いて 寂光院のしば漬けは
建礼門院様が告げた産物
帰りに母屋へ寄ってください
粥としば漬けをお出しします

……

『三間御堂』

来る日も来る日も
朽ち荒れた御堂から
祈れる声有り
瓦には雑草が茂り
倒れた壁の間から
念仏は響き渡り
風の悪戯かと思う
が近づくと
一心不乱に祈る僧の
念仏の響きなり

春の陽々も
夏の暑さ盛りにも
秋の木枯らしが突風にも
冬将軍の日々も
ただただ祈れる声あり
一心不乱に
一人祈れる尼の声あり
仏唱の響きが風に流れ

春は緑の葉の中を
夏はむせる草の中を
秋は枯れた木々の中を
冬は雪の中を
透り渡り染み込んでいく

訪れる人もなき
山奥の御堂に
祈れる声あり
春の日々も
夏の日々も
秋の日々も
冬の日々も
祈れる響きあり
御堂の屋根は穴が開き
草が生い茂り
御堂の壁は朽ち崩れ
一心に祈れる声あり
来る日も来る日も
祈れる響きあり

……

祈ることによってしか
生命は救われないのか
幸福にはなれないのか

残雪が眩しく照り返る中
彼女が祈っていた後を
見つめながら私は耳を澄ました

End all 1996/02